

平成 25 年度（2013 年度）夏季展示

あそび大はっけん



ーみんなで博物館へ行こうー



平成 25 年（2013 年）7 月 20 日（土）～8 月 25 日（日）



ギシギシのひな人形とツバキのぞうり

（撮影／松井 鴻氏）

現代の子どもたちの多くがテレビやパソコンのゲーム機などで遊んでいますが、かつて子どもたちは野原・林や池・川など身のまわりに豊かにあった自然の中で遊び、草木や竹で遊び道具を工夫していました。

こうした遊び方の違いの背景には、子どもたちをとりまく自然や生活の環境の変化があるのではないのでしょうか。この展覧会では、子どもの遊びを通して、今の私たちの暮らしの中の自然や環境のことを考えてみたいと思います。

「あそび大はっけん」に想う

昭和17年(1942年)の七夕の日の朝、大阪の西の端、淀川と神崎川に近いところに生まれた私には、空襲で雨のように降る焼夷弾^{しょういだん}が花火のごとく美しく見えた記憶があります。戦争の荒廃から今日までを見てきた世代であります。貧しい時代でしたが、自然がいっぱい残っていた記憶もあります。

現在の新大阪、三津屋とか宮原あたりは麦畑で、ヒバリや野生のウズラの巣を探していました。東三国から上新庄のあたりまでは、新御堂筋ができるまでは泥田で蓮根畑が多く、三国から十八条を経て榎木橋を渡れば、稲穂が波うつ水田でした。今の江坂の賑わいからは想像もできません。小学校の遠足が千里山や嵯峨野^{うさぎが}での兔狩りでした。まさに「兎追いしかの山」が吹田にはありました。

結婚して子どもができて、吹田に移り住んだのには理由があります。一つは大阪市内には見なくなった白鷺^{しらさぎ}など水鳥がいること、もう一つは野草など自然豊かな場所であること。西淀川公害でいくつもの病気を持った自分の夢、想いがありました。60年前の吹田や北摂を知る者として自分の成すべきことは何かと考えたのは60代になってからです。日本の高度成長に合わせて頑張ったつもりでいましたが、地域の環境を壊したのは自分たちではないか。子どものころ駆けまわりいろんなものに触れた原っぱや土手、川や池や林に思いが募ったときに吹田の環境活動に出会いました。市のシニア環境大学に入ったのも、アジェンダ

21すいたの自然部会に加わったのも、博物館の夏季展示に関わっているのも、吹田の昔の姿をこの目に焼きつけた者としての想いです。

アジェンダ21すいたの自然部会では、生物多様性に取り組んでおり、特定外来生物の調査をし、オオキンケイギクとナルトサワギクの2種類を見つけました。その調査では、多数の在来種のかわいい花や珍しい野草も見つけました。今後さらに調査してこれらの保護につなげたいと思います。

今夏の博物館夏季展示は、「あそび大はっけん」というテーマです。吹田には、竹や木のおもちゃや遊び道具を研究したり製作したりしている方、木の葉・枝・実を使った工作をされている方、野草を使った昔遊びを研究されている方がおられます。今回はそういった方々にも実行委員に加わっていただき、充実した展示になりました。さまざまな昔の遊びやおもちゃのほか、びわ湖の水中生物の観察や丹波竜の化石発掘現場など楽しく学べるバスツアーなども用意されています。

昔を偲^{しの}ぶ懐古ではなく、子どもたちに昔の遊びから何か大きな発見をしてもらえたら、そして、それが環境への配慮や自然の保全、生物多様性への想いの向上につなげられたらと思います。

吹田には大きな可能性があることを知っていたできたく、涼しい博物館に市民のみなさまがお越しいただけることを、実行委員一同、心より願っております。(夏季展示実行委員 伊藤忠征)



オオキンケイギク
(佐井寺北バス停付近)



ナルトサワギク
(佐竹台6丁目付近)



ヒメウス(在来種)
(吹田市内)

親子で発掘する丹波竜化石

私と化石との出会いはうーんと古く、中学校の理科の先生の影響が大きかった。この先生は吹田では珍しく、お茶の水女子大学卒業の方で、私たち中学生には、新進気鋭のインテリ先生に映った方でした。理科の好きな連中は放課後になると理科室に話を聞きに行くのが日課になっていました。夏休みに学校の裏山で捕獲した大きなシマヘビを水酸化ナトリウム溶液で時間をかけて肉片を溶かして骨格標本をつくったのもこの時期でした。懐かしい話です。

私は大学で地学を専攻しました。指導を受けた先生がたまたま丹波帯の中・古生層を研究している方でした。かつて篠山盆地の地質を研究し、篠山盆地が東西軸の向斜褶曲していることを発表され、その折に篠山層群は中生代の白亜紀の地層で、赤茶けた泥岩・砂岩の互層が盆地の西部に存在することと下関の硯石層群と対比ができることなどを野外巡検で教わりました。



— 現在の海岸線
— 白亜紀前期の海岸線
■ 淡水湖

左の図は「日本列島のおいたち＝古地理図鑑」（湊正雄監修）を参考に作成したものです。

白亜紀前期の古地理図

（1億3000万年前から1億1100万年前）

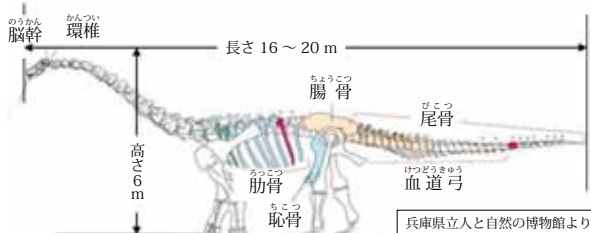
今から1億4000万年前から1億2000万年前の古地理図では大陸とは地続きで、日本海はまだありません。篠山、福井、新潟などには淡水湖が点々と存在しています。丹波竜は河川によってこの淡水湖に運ばれ、泥・砂に埋まり湖底に堆積したと思われます。赤茶けた地層に埋まった状態で発見されました。この赤茶けた色は鉄分で陸源性堆積物と考えられています。当時、先生がこの地層から恐竜化石が出てくる可能性を示唆されたことが思い出されます。

丹波竜化石が発見されたのは平成18年（2006年）8月7日です。発見者の足立洲さんと村上茂さんは地元の方で、足立さんは約20年前から太

古へのロマンに魅せられ、化石探しに取り組んでおられました。今回の発見に、「生きているうちに見つければと思っていた」と感激に浸り、現場保存のボランティアなどに貢献したいと語っておられました。



丹波竜の発見者
足立洲さん（右）と
村上茂さん（左）



丹波竜（ティタノサウルス）の発掘された部位

これまで6回にわたる発掘調査が行われました。調査期間は篠山川の水かさが減る冬場です。この数次に及ぶ調査で、竜脚類の歯、肋骨や獣脚類の歯の他に鳥脚類の歯などが発見されています。

■「元氣村かみくげ化石発掘体験コーナー」

丹波竜の発掘は多くの恐竜ファンにロマンをもたらししました。村では調査ごとに現場の赤茶けた砂岩・泥岩の岩片を布袋に詰めて、希望者に発掘体験ができる化石発掘体験コーナーを開設しました。たいへんうれしいことです。子どもたちが化石を見つけたときの感動は目の輝きに現れ、忘れることのない喜びをもたらしています。

8月10日の化石発掘体験では、発見者の村上茂さんが多忙中にも関わらず、吹田からの参加者に発見した時の感動を話してくださる予定です。

（夏季展示実行委員 平岡由次）



平成22年（2010年）頃の発掘体験の現場。今ではテントを張って日陰をつくり、風通しのよい環境で発掘体験ができます。

チリモン探しの楽しさ

チリメンジャコはイワシの稚魚です。チリメンモンスター探しは、チリメンジャコ漁の網にイワシと一緒に捕獲された海の小さな生き物を探す遊びですが、大変奥が深いです。

初めての人でも、見つけたチリモンを図鑑の写真やイラストと絵合わせで名前を当てるのは楽しいですし、図鑑にレアマークの付いた珍しいチリモンに出会えた時は、“新顔のチリモン見つけた！”と小躍りしてうれしい気分になれるのが、チリモン探しの魅力です。チリモンは種によって産卵時期が決っていますので、経験を積んでこの時期だと〇〇チリモンが多く出るということが判れば、見分ける能力がグーンと上がります。さらにチリモンは成魚としての形態がまだ完成していない変態期ですので、大きくなるにつれて体の形や色がドンドン変化していきます。1種類に限って小サイズから大サイズまで集めると、その形態的变化がわかるので大変面白いです。左ヒラメに



眼が移動前のメイタガレイ 9mm



左の眼が右側に移動したメイタガレイ 13mm



ハタのなかま 背鰭と腹鰭の棘が非常に長いのは、捕食されないために発達させた形質と考えられる。 11mm

右カレイと言いますが、生まれたてのヒラメ・カレイの眼は左右にあります。一定の大きさになると片方の眼が反対側に移動します。一つ眼カレイや2つ眼カレイをチリモン探しで見つけるのも面白いです。

チリモン達は“食う、食われる”という厳しい海の中にいます。食われないために背鰭^{せびれ}や腹鰭^{えさ}に長い棘^{とげ}のあるものがある一方、効率よく餌^{えさ}をゲットできるよう鋭い歯が生えているものなど、チリモン達の被食者・捕食者としての生き残り戦略を知ることができます。

チリモン探しの楽しみを多くの方に知ってもらおうと、私はチリモン写真を撮ってきました。これまでに集めた魚チリモンは約 100 種、魚以外のチリモンは約 120 種、約 600 枚の写真を“チリメンモンスター WEB インターラクティブ図鑑”に掲載しています。

(大阪自然環境保全協会 西田百代)



魚食性のエソ 口にくわえた獲物が逃げにくいよう鋭い歯が上下にびっしり並ぶ



上下に鋭い歯がびっしり並ぶアナゴのレプトケファルス幼生

磁石と吹田 そして「くらしと遊び」

日本が世界の中で最も高性能な磁石を開発し、その最大の生産地であることは、あまり知られていません。日本で磁石の本格的な生産が始まったのが、吹田の地であることは、なお知られていません。それは戦後まもなくのことです。吹田市の神崎川^{ほとり}の畔にある工場^{うぶごえ}で産声を上げ、筆者が入社した当時は日本の磁石の大半をここで製造していました。もちろん戦前・戦中から軍需物資として研究や小規模生産は続けられていましたが、民需用の本格的な生産が始まったのは戦後であり、ここ吹田です。

この度、縁あって、この博物館で「磁石とくらし」をテーマに夏季展示の中で、「磁石ってなんだろう!! 遊べるの?」「どんなところに使われているのかな?」「ここにもあそこにも使われてるよ!!」というようなことを、わかりやく展示しようと考えて目下奮闘中です。そして、磁石について知ってもらいたいし、遊んでほしいと願っています。

今回の夏季展示のメインテーマは「あそび大はっけん」です。磁石を使った遊び、つまり磁石のおもちゃや磁石を使ったカラクリ装置などで楽しんでもらえたらと思っています。同時に「なんでだろう?」と考えてほしいし、磁石の不思議さについて知ってもらいたいと願っています。そしてくらしの中で磁石がどう使われているかもぜひ知ってほしいと思います。

びっくりするような本格的な展示も一部行う予定にしています。

歴史を振り返ってみますと、日本の磁石の研究

は東北帝国大学（当時）で本多光太郎博士の研究から始まったのですが、財閥系の資金援助で研究・開発が続けられ、その磁石はそのときの社主の頭文字からとって、KS 磁石と名づけられました。当時の世界を驚かせた高性能磁石の誕生です。その磁石は吹田市の工場で量産が開始されました。ラジ



浮力椅子

オの小型化や当時爆発的に普及した自転車用ランプなど戦後の暮らしの向上に大いに役立ちました。もちろん日本の高度経済成長時代を支えてその発展に寄与したことは言うまでもありません。

その後、昭和 57 年（1982 年）に夢の磁石といわれた世界最強のネオジム磁石が世界で初めて、同社の研究者によって発明され今日に至っています。このネオジム磁石が発明されてから世の中の機器の高度化、小型化が一気に広がり、革命的な製品が次々と生まれました。例えば自動車のハイブリッド化もネオジム磁石が無ければそう簡単には実現はしなかったと思われます。ハイブリッド車一台に磁石が 200 個以上も使われています。その他、新幹線や航空機、高度医療機器などあらゆる場面で重要な役割を果たしています。

磁石はくらしの中では華々しい姿は見せていませんが、各種の電子装置の中、リニアモーターや MRI などきわめて重要な部品として使われています。ほかに義歯・ピアスなどめずらしい使い方もされています。

今回の夏季展示では、その磁石について、遊びから入ってその奥にある多彩な磁石の世界に触れていただきたいと願っています。さあ一子どもの時にかえってあそびましょう。

（夏季展示実行委員 小川忠夫）



乾電池と磁石を使ったモーターの実験

周りの銅線がモーターの原理でくると回ります。

旧西尾家住宅
(吹田文化創造交流館)

第二回小さな特別展「西尾家に伝わった人形たち」を開催



ひな飾りの展示風景

平成 25 年（2013 年）3 月 16 日（土曜日）から 4 月 7 日（日曜日）まで、旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）において、「第二回小さな特別展 西尾家に伝わった人形たち」を開催しました。会期中の総来場者数は 1,131 名で、昨年同時期に開催した「小さな特別展 蒔絵師 神戸雪汀と西尾家」を大きく上回る数の方々に越えただきました。

今回の特別展では、西尾家に伝わった、明治時代後期から大正・



昭和前期までのひな人形や五月人形等の節句飾りをはじめ、節句に関わる絵画や江戸時代後期の作品とされる貝合わせ等を展示しました。節句人形をこれほど大規模に展示するのは初の試みです。また、3 月 20 日（水曜日・祝日）には、丸平大木人形店資料室丸平文庫の大木雛子氏を講師に迎え、講演会を開催。参加した 62 名の方々が熱心に耳を傾けておられました。

(中岡宏美)

講演会のようす

五反島遺跡

現地説明会開催される

平成 25 年（2013 年）6 月 1 日（土曜日）に南吹田 5 丁目 32 の南吹田下水処理場^{ごたんじま}で五反島遺跡発掘調査の現地説明会が開催されました。今回の調査では、現地地表下約 6 m の深さで川の流路の底面が確認され、特に白鳳^{はくほう}～奈良時代の遺物がまとまって出土したことが注目されます。

現地説明会では市民など 166 名の参加者を得て、調査状況の説明等が調査担当者によって行われました。



現地説明会のようす

調査成果の詳細については、後の博物館だよりに掲載する予定です。

(西本安秀)



出土した白鳳時代の軒丸瓦

すいたの石造物③ 旧西尾家住宅の蹲踞^{つくばい}

重要文化財 旧西尾家住宅の庭園内に所在する石燈籠については、『博物館だより』NO.36（平成21年1月9日発行）でご紹介しましたが、今回、茶室積翠庵^{せきすいあん}の南隣にある蹲踞を取り上げます。

蹲踞とは低く据えられた手水鉢^{ちょうずばち}と役石^{やくいし}（役割を持った石）一組のことをいい、茶室に入る前に手を清め、口をすすぐために使用され、茶客がつくばう（うづくまる）ように使うことから名付けられたといわれます。

積翠庵南隣蹲踞の手水鉢は花崗岩製で径60cm、高さ49cmを測る鉄鉢形をし、上面に水をたたえる径27cm、深さ11cmの穴があります。側面には四方に1文字ずつ異なった梵字^{ぼんじ}（古代インドの文字の一種）が天地逆に刻まれています。まず向かって正面には𑖀（バン）、右側には𑖃（バク）、左側には𑖄（バー）、背面には𑖆（バ）と記されています。これらの文字は梵字のうち、五大種子^{ごだいしゆじ}（キャ、カ、ラ、バ、ア）の一部で、供養塔の一種である五輪塔の水輪の四方に刻まれるものの一部なのです。しかし、茶庭に関わる手水鉢にどうして梵字が刻まれているのでしょうか。

蹲踞の手水鉢は一般に自然石を利用したもの、石材を球形・方形に加工したもの他に既存の石燈籠や塔などを利用した「見立てもの」があります。この手水鉢は「見立てもの」に当たり、五輪塔の水輪をひっくり返して利用したというわけです。

また、旧西尾家住宅の庭園が明治26年（1893年）に茶室とともに京都の藪内休々斎の指導により造られる際に、藪内家の茶室燕庵^{えんなん}前の文覚上人^{もんがくしやうにん}供養塔の水輪と伝える手水鉢を意識して旧西尾家住宅の手水鉢が設置された可能性があります。（西本安秀）

* 五大種子 = 仏教用語で万物をつくる五つの要素（空風火水地）のそれぞれに仏の象徴として記した梵字のこと。



茶室積翠庵前の蹲踞（北から）



1 (バン)



2 (バク)

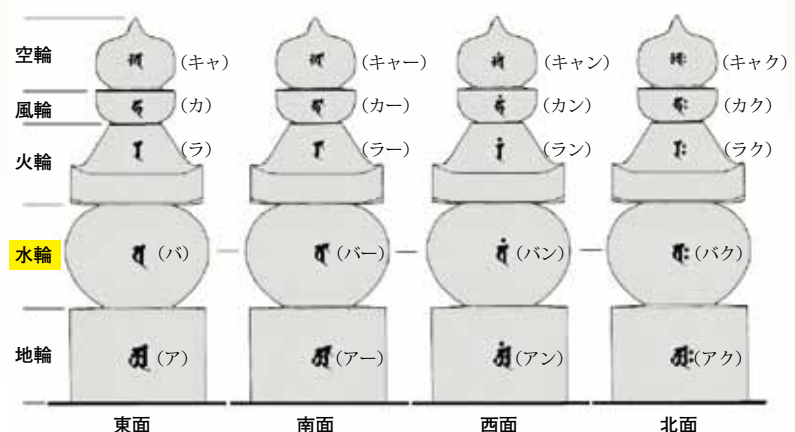


3 (バー)



4 (バ)

手水鉢に刻まれた種子



五輪塔四面の種子

予告

企画展「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」

会期 平成25年(2013年)9月8日(日)～9月29日(日)



昨年度の展示

当館では、平成18年(2006年)より「見る」ことだけでなく「さわる」ことなどに重点をおいた展示に取り組んでいます。毎年、新しい企画を試み、その成果を積み上げてきました。平成23年度(2011年度)秋季特別展「さわるーみんなで楽しむ博物館ー」では、実習生による館蔵品展示を兼ねて実施しました。展示室では観覧者が学芸員となり、選んだ資料の調書を取ったり(資料の名称や特徴などを資料カードに書き取る)、展示ケースの中に陳列してみる学芸員体験コーナーを設けました。

昨年度の企画展「さわって楽しむはくぶつかん in すいた」では、吹田の音訳ボランティアグループの方から、来館者に対して音声で資料の説明を

できないかという提案が出されたのを受けて、むしろボランティアの方々に来館者へ個々に資料の説明をしていただければ、高齢者や視覚障がい者にとっても、より展示品がわかりやすくなるだろうと考え、展示案内をお願いしました。事前の講習会では「歴史の説明はむずかしい」と言いながらも、楽しんで取り組んでくださいました。

また、常設展示でも「さわる」を取り入れられないかと、各分野の学芸員が常設展示資料と観覧者との仲介役となる「さわって“見える”ーモノと人との対話ー」イベントを行いました。メニューは「瓦をさわる」(考古資料)、「江戸時代の刷物すりものを読んでみよう」(古文書)、「千里ニュータウンの生活にふれる」(近現代資料)、「掛け軸の魅力」(美術資料)、「くわの意外なお話し」(民俗資料)の5つです。さわることや、解説パネルでは書ききれない言葉を補うことにより、資料に対する理解をより深めてもらえたと思っています。このときの成果を常設展に取り入れ、平成25年(2013年)4月より「稲作の一年」のコーナーにさわれるクワを設置し、クワにもいろいろなちがひがあることを体験できるようにしました。

今年度もさらなる工夫をして、展示・企画の充実をめざします。(池田直子)



さわって“見える”ーモノと人との対話ー



アイグワとオワリグワの展示

吹田市立博物館だより 第54号
平成25年(2013年)7月10日発行

吹田市立博物館 吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL.06-6338-5500 FAX.06-6338-9886
<http://www.suita.ed.jp/hak/>

この冊子は3,000部作成し、1部あたりの単価は25円です。